同志社大学広報

CONTENTS

2……年頭所感2022
輝く青春のために
～人との交流と多様な教育研究～
●大学長
植木　朝子

4……EUキャンパス Doshisha Week 2021 開催さる！
Doshisha and Tübingen Students Exhibited Their Contributions to Manga Culture and Sustainable Development/SDGs!
●学生支援センター所長
下楠　昌哉
●EUキャンパス支援室長
和田　喜彦
●学生支援機構事務部長
井上　真琴
●国際連携推進機構事務部長
田中　竜哉

8……学事
12……人事
12……規程
12……キャンパスニュース
18……IT サポートオフィスより
19……在外研究レポート
●グローバル・コミュニケーション学部教授
伊勢　晃
20……私の提言
●高等研究教育院事務室　事務長
水船　昌彦

2021年に同志社国際学院初等部・国際部は創立10周年を迎えた。
11月19日には、同志社国際学院10周年記念式典が催された。

2022年1月10日
広報部広報課発行

No.520

同志社大学公式Facebookで
最新情報をチェック！

年頭所感2022

輝く青春のために
～人との交流と多様な教育研究～

大学長
植木　朝子

あけましておめでとうございます。同志社創立147回目の新春をむかえ、創立150周年まで、残り３年となりました。2022年が皆様にとりまして、健康で幸せな年となりますよう心から祈念申し上げます。

新型コロナウイルスの新規感染者数は第５波がおさまり、減少傾向となっていますが（原稿執筆時2021年12月上旬）、まだまだ予断を許さない状況です。本学では、感染予防のためのガイドラインの制定やワクチンの職域接種を実施するなど、積極的な感染予防対策を行ったため、学内における大規模なクラスター発生の事例はありませんでした。今後も感染者数が増加に転じないよう、各人がこれまで同様、感染予防対策を徹底することが求められます。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

【2022年度の授業実施について】

本学は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、2021年度は、対面授業とネット配信授業を併用して授業を行っており、対面授業については教室収容定員を大きく制限したコロナ定員で実施してきました。2022年度は、対面授業の教室収容定員を学期末試験時の定員である試験定員に変更しますので、これにより、大多数の授業科目を対面形式で実施できる見込みとなります。しかし、まだ予断を許さない状況であることを勘案すると、コロナ禍以前のように対面授業を本来の教室収容定員で行うことはできません。したがって、一部の科目についてはネット配信といたします。

大学教育は知識を提供することだけがすべてではありません。五感を活用した学び、そして実空間を共有する学生同士の白熱した議論の場を設けること、さらにいえば正課との両輪である正課外活動の場を提供することも、大学の重要な役割です。本学は、引き続き感染拡大予防に努めながら、キャンパスで学ぶ機会を積極的に提供いたします。

一方で、ネット配信授業にも対面授業とは異なる教育効果がありますので、これまでの経験を踏まえて、対面授業とネット配信授業それぞれの利点を最大限に生かせるハイブリッド型の教育を推進したいと考えています。

教職員の皆様には未曾有の危機の中、学びの継続のために様々な工夫を重ねて、ご尽力を賜りました。この場をお借りして深く御礼申し上げますとともに、次年度の開講に向けてご協力をお願いいたします。

【継志寮の始動】

2020年3月7日に起工式を行った同志社大学初の教育寮である「継志寮」が2021年９月７日に竣工式を迎え、9月末から始動しました。継志寮での学びの特長は、各国から集まってきた学生と共に暮らすというグローバルな視点と、京都で暮らすというローカルな視点の双方を備えているということです。国籍、性別、障がいの有無、文化、宗教等の様々な違いや背景を持つ学生が、混住・交流する環境下で多様な価値観を享受し、その違いを新たな創造へ導く力を養成します。他方で、地域社会と共生していくことも重要です。この新しい寮においても、寮生であるとともに地域、つまり上京区、小川学区、徳大寺殿町の住民であることを自覚して近隣居住者と共生し、良好な協力関係を保つことをも目指しています。

寮生が共に学ぶ環境を整備したうえで、様々なResidential Learning Program(RLP) を提供する、日本の大学ではあまり類をみない「教育寮」です。学生寮は、従来から、他の学生との共同生活を通した人格形成の場として有益であると指摘されていますが、継志寮ではこの有益性をより強め、かつ効率的にしていくため、寮生が地域社会との関わりを通して学習する取組等を RLP として提供し、参加を義務化しています。

RLP では複数のテーマを設けています。まず教育寮の生活基盤を整える目的で、寮生が生活しやすく、次年度の入寮生のスタートアップが円滑になるような仕組みやルールを考える、そして寮生の国籍や言語、障がいの有無といった違いを理解し合いながら、寮生全員が暮らしやすい方策を検討します。さらに、地域社会と共生するために、上京区まちづくり推進課長や小川学区の自治会長の講演を聞き、どのような関り方が望ましいのかを考えます。他方で、環境マネジメントとして継志寮から排出されるエネルギーの理解や、ごみの減量、寮における環境マネジメントシステム導入に向けた検討を行うなど、RLP として様々な学びを準備します。

同志社大学ビジョン2025では「学びの形の新展開」として新島塾や教育寮での学びなど、単位取得を伴う正課科目の枠を超えた学びも追求しています。本学では、正課外を含めて特長的な教育プログラムが数多く行われています。

【All Doshisha Research Model（COVID-19 Research Project）における成果】

2020年７月に新型コロナウイルス感染症に関する緊急研究課題として、COVID-19 Research Project を立ち上げました。コロナウイルスそのものに関する研究から、コロナが引き起こした社会や経済、そして教育現場の変化、またポストコロナの世界はどうなるのかといった課題について、14学部16研究科を有する本学の多様な専門分野の「知」を結集させて、研究推進を行いました。具体的には、「健康・医療」「社会・経済」「教育・文化・生活」の３領域を基盤とした、治療、検査・分析、予防・感染対策、制度・システム、経営・働き方、国際、教育、文化・生活様式、コミュニケーションの９分野にわたる77課題を採択しました。

本プロジェクトの研究成果については、7月28日の第１回を皮切りに、計５回のシンポジウムをオンライン形式で発信しました。これまで研究成果の発表は対面形式で実施していましたが、コロナ禍を契機にネット活用としたため、オンラインセミナーツール（Zoom Webinar）を利用したライブ配信に加え、当日視聴できなかった方も録画をストリーミング配信することによりオンデマンドで後日確認できるなど、新たな利点を見出せました。

All Doshisha Research Model は、社会課題解決に向けて本学の研究リソースを結集させる取組です。研究開発推進機構において、現代社会の重要テーマをめぐる研究を募集し、研究者がそのテーマを多様なアプローチから切っていくという、まさに総合大学ならではの強みを発揮できます。また同一テーマを異なった視座から見ることで、研究者同士も新たな発見ができ、研究の深耕はもとより、このプロジェクトを機に次なる共創へと繋げることも可能になります。そして、次に重要なのはこの研究成果を教育に還元していくことです。高等教育機関である大学は、生まれた研究成果を教育にフィードバックする使命があります。ぜひこの方法について、皆さんの知恵をお借りしたいと思っています。

2020年度は緊急課題としてコロナを募集テーマにしましたが、この Research Model を生かして次なるテーマに挑戦していきたいと考えています。今後ともご協力をお願いいたします。

【結びに】

ブレイディみかこ氏の『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は2019年に刊行され、60万部を超える大ベストセラーになりました。2021年6月には、その続編とも言うべき『他者の靴を履く』が刊行され、話題になっています。『ぼくはイエローで……』は、筆者の、当時中学生だった息子の学校生活を中心に、今の英国の抱えるさまざまな問題―貧困、差別、分断など―を見つめるエッセイであり、困難を乗り越えていく息子と筆者の成長の物語と言えます。この中に、印象的な親子の会話が出てきます。

「でも、多様性っていいことなんでしょ？学校でそう教わったけど？」
「うん」
「じゃあ、どうして多様性があるとややこしくなるの」
「多様性ってやつは物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えないし、そりゃないほうが楽よ」
「楽じゃないものが、どうしていいの？」
「楽ばっかりしてると、無知になるから（中略）多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」

大学は本来、多様な人々が出会う場所です。その出会いの機会が極端に制限されてしまっている今のオンライン生活は、慣れてしまえば「楽」で、それを歓迎する声もあります。それでも、「楽」ばかりしていていいのか、という漠然とした不安は、多様性から目をそらすことに繋がるのではないか、といったおそれから発していたのだと、この一節を読んで、私は自分の気持ちが整理できたように思ったのです。

冒頭に記しましたように、大学においても DX 導入の議論が加速していますが、だからこそ対面で学ぶ意義を再認識し、その機会をできるだけ提供していく必要があると思っています。今、ここにあるキャンパスは、多様性の学びの場として、かけがえのない場所だからです。

2020年度の春学期は、政府の緊急事態宣言や京都府の要請等を受け、授業を原則ネット配信で行いました。その際、特に新入生からは、「孤独な毎日で大学に入ったという気がしない」との声が届き、教職員一同、胸を痛めたことでした。本学の美しいキャンパスに集い、友人と語り合い、教員から直接に指導を受ける、という当たり前のことを奪われた辛さは察するに余りあります。学生たちがその苦しい期間を取り戻せることを祈っていた折も折、2021年度の同志社 EVE のテーマは「青春奪還」でした。EVE 実行委員会委員長によれば、このテーマには、コロナウイルスの影響で失われた青春を、EVE を通じて取り戻してほしいという願いを込めたとのことでした。

学生たちが青春を謳歌できるように、私たちは人と人との交流によって豊かな多様性に輝くキャンパスを創っていかなければなりません。引き続きお力添えのほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

※本原稿はＵＤフォント（ユニバーサルデザインフォント）を使用しています。

（うえき・ともこ）

EU キャンパス Doshisha Week 2021 開催さる!

Doshisha and Tübingen Students Exhibited Their Contributions to Manga Culture and Sustainable Development/SDGs!

学生支援センター所長　下楠　昌哉
EUキャンパス支援室長　和田　喜彦
学生支援機構事務部長　井上　真琴
国際連携推進機構事務部長　田中　竜哉

はじめに

11月25日、26日に Doshisha Week 2021をオンライン形式により開催した。

Doshisha Week は、EU キャンパス開設に伴い、テュービンゲン大学（以下、UT）内ではもちろん、ドイツ国内、EU 圏内における本学の認知度を高めていくことを目的に2019年度から開催している行事である。当初は本学と UT との「研究交流」に重きをおき、2019年度はテュービンゲン大学において対面形式で、2020年度はオンライン形式により、教員同士の研究交流事業を開催した。今年度は、EU キャンパスのブランディング戦略の一環として、更なるプレゼンス向上を期待し、初めて「学生・文化交流」を主軸とした取組みにチャレンジした。

学生支援センター所長・下楠昌哉教授による開会宣言で、学生交流イベントでありながらも格調高い雰囲気の中での開幕となった。初日は「漫画」、二日目は「Sustainable Development/SDGs」をテーマに、学生同士が意見交換やワークショップを通じて交流を深めた。

一日目

11月25日の「漫画」は2部構成として、第1部は社会学部の竹内長武教授による「現代日本漫画の表現を考える」と題した講演会を行い、第2部は同志社大学文化系公認団体の漫画研究会による「漫画を描いてみよう」と題したワークショップを実施した。

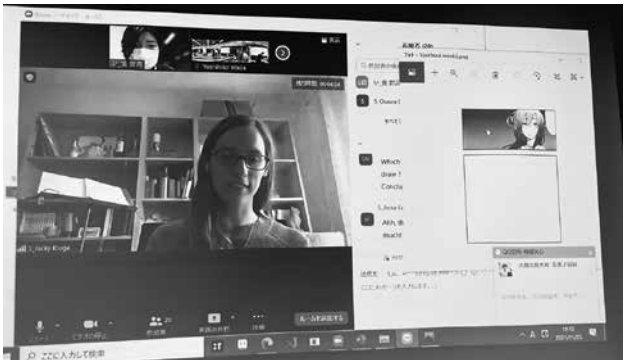
第1部の講演会には約75名の参加があった。司会は、漫画研究会代表の黄潤青さんと、本学に留学経験がある Jacqueline Kluge さん（イギリスから参加）が務め、竹内教授が事前に収録した講演を配信した。講演は日本語で行われたが、英語の字幕が付いていたため、UT の視聴者にも理解が容易になり、その後の活発な質疑応答にも繋がった。

竹内教授は講演のなかで、日本漫画の黎明期から現代漫画まで幅広くその表現方法について触れられ、手塚治虫氏の漫画から ONE PIECE など現在も連載されている漫画まで多岐にわたって解説された。漫画は欧米でも人気のメディア・文化であることから、専門的な解説でありながらも興味の尽きない内容で、約60分の講演が短く感じられた。講演終了直後から多くの学生が質問を寄せ、そのすべてに答えることはできなかったが、「現代漫画で実験的な表現を工夫している漫画はありますか」といった分析や評価に関わる質問が発せられた。なお、UT 学生と竹内教授との質疑応答に関して、英日通訳、日独通訳を行うなど、漫画研究会の司会者同士で臨機応変に対応した差配は見事であった。

竹内長武教授による講演会

第2部「漫画を描いてみよう」ワークショップには、UT からは37名の参加があり、UT 側で事前にチーム編成を行い、3チームに分けて実施した。オンラインでの交流であるため、最初にチームごとの自己紹介を行うアイス

漫画研究会によるワークショップ「漫画を描いてみよう」(1)


漫画研究会によるワークショップ「漫画を描いてみよう」(2)

ブレイクを実施した。その後、ストーリーを展開するうえで重要な起承転結、漫画の描き方の具体例について、全員で理解を深めたうえで、再度チームに分かれて漫画を描いてもらった。30分の時間をかけて2コマ漫画を描くことになったが、それぞれに個性的な絵が紹介され、学生同士の創造のヒントや発想の工夫の気付きにもなっていた。対面ではないため、現場における熱量を感じることはできなかったが、画面を通じて笑顔も溢れており、楽しい様子を垣間見ることができた。

当初30分の作成と振り返りを3分と予定していたが、予定時間を過ぎても議論は冷めやらず、下楠学生支援センター所長の閉会宣言の後、20分延長の意見交換の機会を設けることで、学生同士での交流をさらに深めることができた。

二日目

二日目となる11月26日は、「Sustainable Development/SDGs」をテーマに本学から学生支援センター登録団体のASUVID 今出川による発表を、UT からは学生団体のThe “Colourful Meadow Initiative” Tübingen による発表をそれぞれ行った。参加者は約35名であった。

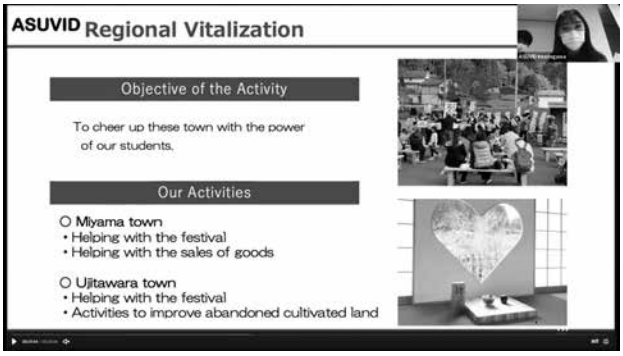
EU キャンパス支援室長・和田喜彦教授による ASUVID 今出川の紹介の後、代表の岸本涼子さん、松下幸弘さん、樫本季里さんにより、ASUVID 今出川の活動の内容として「子どもの教育支援」「身近な国際協力」「地域活性化」について報告がなされた（次頁画像参照）。

その後の発表では、国連が採択した「SDGs」の12番目の目標「つくる責任、つかう責任（持続可能な消費と生産のパターンを確保する）」に深くかかわる活動として、「琵琶湖プロジェクト」が取りあげられた。同プロジェクトでは琵琶湖湖畔4.5km に亘ってクリーンアップ活動を行い、1日の活動で45リットルの大きさのごみ袋164個を必要とするほどのごみが流れ着いていたことが紹介されるに至った。琵琶湖一周の活動を目指しながらも、自分たちの日常の活動だけで成し遂げられるものではない限界を十分に認識し、地元の方々をうまく巻き込んで活動を実施できる体制にしていきたい想いが伝わる内容であった。

UT からの質問には「非常に素晴らしい取組みであるが、湖畔の長い距離を対象にして、どのように活動を続けていこうと計画しているのか、またその情熱はどこから来るのか」といった質問があった。ASUVID 今出川からは、先輩の想いを受け継いで継続的に実施するモチベーションを皆が大切にしていると受け応えたことが印象的であった。

続いて、UT の Potthast 教授より The “Colourful Meadow Initiative” Tübingen の紹介があった。Potthast 教授は生物多様性、環境倫理や Sustainable Development の分野で著名な研究者であり、2020年2月に本学で開催された UT との国際シンポジウムにて研究発表された方である。

The “Colourful Meadow Initiative” Tübingen からは、



ASUVID 今出川による発表「地域活性化」

ASUVID 今出川による発表「琵琶湖プロジェクト」

都市における生物多様性の保全活動についての発表が行われた。「SDGs」の15番の目標である「陸の豊かさも守ろう」に関係する内容であった。「手入れされていない草原」「見渡す限りの美しいタンポポ畑」、どちらが多様性に富んでいますか？という問いかけから始まり、ヨーロッパにおける草原の減少を俎上にのせ、その解決策を見つけるための活動について報告された。昆虫の種と個体数の増減などデータ分析に基づいた内容が紹介され、テュービンゲン周辺の56か所の草地約15ヘクタールをモニタリングしながら監視と保全、またネットワークづくりと啓発活動を実施しており、根本的な問題解決に向けて動いている活動がみえる発表であった。

両大学の取組みは、環境保全に積極的にかかわっている現況、かかわろうとする意思が詳細にわかる内容であり、どうしたらより効果的に情報発信を行え、多くの人々に理解をしてもらえるのかを考える良い機会になった。

質疑応答の場面では、SDGs に関心のある学生同士の交流を活かし、両大学の活動に継続的発展をもたらすための施策として、本学と UT の学生が、それぞれ京都と UT で行われる他の学生イニシアティブに参加するインターシップを設けてはどうか？といった意見が UT 側から提案された。また、後半モデレーターを務めてくださった Potthast 教授から、2つの学生報告事例は特筆できる実践例であり、実り多い議論がなされたとのコメントがあった。さらに、Potthast 教授から、国際間の移動は大量のエネルギー消費と温室効果ガスの排出が伴うため、学生のインターンシップ交流を実施するのであれば、sustainable mobility（持続可能な移動）の観点から、1カ月間の滞在ではエネルギーの無駄であり、3カ月以上であることが望ましいという意見を頂戴した。

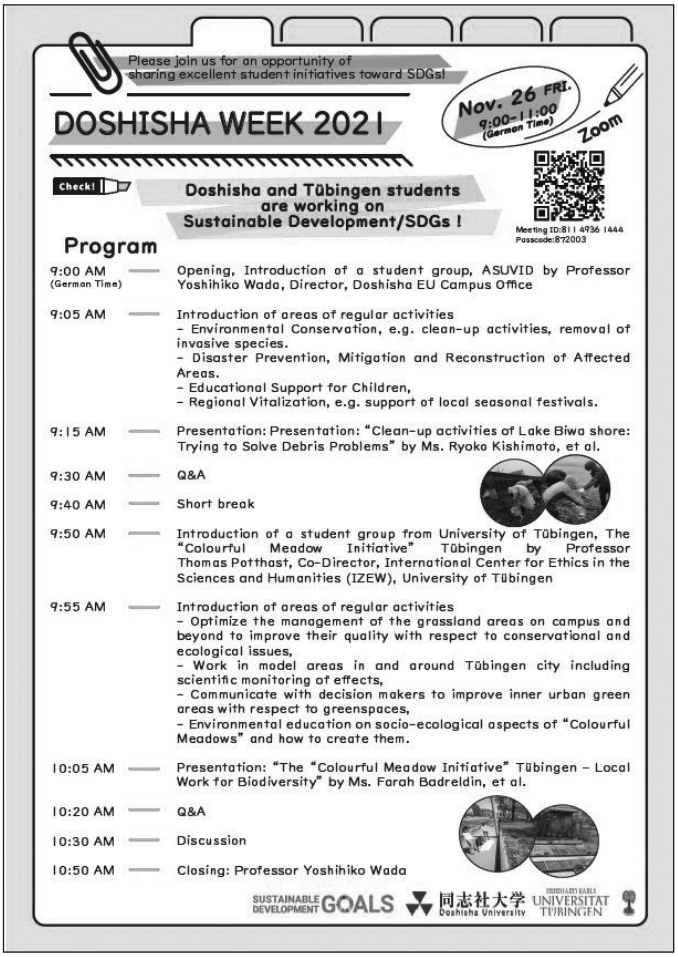
おわりに

最後に和田 EU キャンパス支援室長から2日間に亘って行われた Doshisha Week 2021の開催にあたり、UT 側の日本学科長の Horres 教授、日本学科の Glantz-Schückle 氏、Potthast 教授、国際研究交流担当者の Moser 氏、本学の竹内教授、学生支援課、国際課、そしてとりわけ両大学の学生登壇者の皆さんへの謝辞が述べられて幕を閉じた。

初の学生・文化交流は、非常にチャレンジングであった。学生が自前で作り上げた Doshisha Week 2021は、本学のブランディングを大いに高めてくれたといっても過言ではないであろう。2022年度は新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き、Doshisha Week 2022をテュービンゲンで開催できることを期待している。

（しもくす・まさや）
（わだ・よしひこ）
（いのうえ・まこと）
（たなか・たつや）

漫画に関する講演会・ワークショップのポスター（ドイツ国内広報版）



Sustainable Development/SDGsに関するワークショップのポスター（ドイツ国内広報版）